ルカによる福音書 第11章29節～36節
「光を見る目」
説教者：高橋　誠 牧師

29 群衆がさらに集まったところで、イエスは
話し始められた。「今の時代は邪悪な時代である。
しるしを欲しがるが、ヨナのしるしのほかには、
しるしは与えられない。30 つまり、ヨナがニネ
ベの人々に対してしるしとなったように、人の子
も今の時代に対してしるしとなる。31 裁きの時
には、南の女王が今の時代の者たちと共に復活し、
彼らを罪に定めるであろう。この女王はソロモン
の知恵を聞くために、地の果てから来たからであ
る。だが、ここにソロモンにまさるものがある。
32 裁きの時には、ニネベの人々が今の時代の者
たちと共に復活し、この時代を罪に定めるであろ
う。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改
めたからである。だが、ここにヨナにまさるもの
がある。」
33 「灯をともして、それを穴蔵や、升の下に
置く者はいない。入って来る人に光が見えるよう
に、燭台の上に置く。34 あなたの目は体の灯で
ある。目が澄んでいれば、あなたの全身も明るい
が、目が悪ければ、体も暗い。35 だから、自分
の中にある光が暗くならないように気をつけなさ
い。36 あなたの全身が明るく、少しも暗い部分
がなければ、ちょうど灯が輝いてあなたを照らす
ときのように、全体が輝くだろう。」

●小さなものが全体に

一週間168時間に対して日曜日に教会で過ごす時間はわずか数時間です。そんな短時間の教会生活が私たちの人生に影響を持つのか、という議論も聞いたこともあります。それで週日に教会の活動を増やす、ということも意味があることだと思います。同時に、小さな部分が全体に影響を及ぼす、こともありうるとも思います。

たとえば、親の言葉は、お小言を含めて長く多くの言葉を聞くけれども、その中のわずか数分の話、あるいはわずか数秒の言葉が、後で何度も思い起こすようになって、自分の人生に影響を及ぼすということもあるのではないでしょうか。親の教えや、そこににじむ親の愛を感じたわずかな、しかし重みのある言葉でさえそうならば、まして日曜の朝に聞くのが神の言葉であれば、一週間のうちのわずかな時間でも生活全体を照らすようになる言葉もやってくるとも言えるのではないでしょうか。

今日の言葉は、そういう小さなものが大きな影響をもたらす、という話がなされています。ここでは、体の器官としては小さな目が、体の灯、全身の明るさに関わる、と言うのです。たしかに、目の光を取り込む瞳孔の大きさは､絞っていれば2㎜、一番開いても6㎜にすぎません。その小さな入り口で闇を見るか、光を見るかで私たちの全体が決定するというのです。だからこそ、主イエスは澄んだ目でありのままを見よ、と言われます。何よりも光を光のままに、主イエスご自身をその御姿のままに見なさい、ということです。ややこしく長々しい話よりも、あるいはセンセーショナルな奇跡よりも、そうして見たものがあなたを決定するというのです。

●目が澄んでいれば

だからこそ「澄んだ目を」と言われています。原文は、「目が単純であれば」とも訳せます。「単純な目」とは、主イエスへのひとすじのまなざしということです。

この単純さというのは、必ずしも人が求めるものではありません。「あの人は単純だからなあ」と言うとき、ほめてはいません。賢さを自負する人々からすれば、あの人の信仰はあまりにも単純だと言うことも生じうるでしょう。しかし、一方では複雑に考える人間の賢さが、主イエスの本来の御姿を隠してしまうということも起こるのではないでしょうか。

この前の章で、主イエスは、子どものような純真で単純なまなざしをご自身のもとに帰ってくる72人の弟子たちに見つけて、それを喜ばれ祝福なさいました。「あなたがたがの…目は幸いだ」と（10：21～）。彼らが主イエスを救い主だとひとすじに見たのです。そして神はそれを「知恵ある者や賢い者に隠し幼子たちにお示しになりました」と言われているとおりです。弟子たちに学者は一人もいませんでした。弟子に求められたのは、ひとすじに主イエスを見る澄んだ、単純な目でした。

教会に来るというのも、見る対象に目をこらすことであって、思索を積み重ねて神に届くなどということではありません。そのために、皆さんがお座りになった正面には十字架があります。血を流してくださって愛を注いでくださった主を、じっと見つめるのです。小さな瞳孔をこの光に向けるというのは、私たちとって決定的なことです。

●邪悪な時代

主がそう言わねばならなかったのは、そうではない人々の目を「さらに集まった」人々に見ることになったからです。彼らは、神の子をありのままに見るのではなく、しるしを求めたのです。しるしとは、奇跡のことです。つまり、彼らは表面上主イエスを見ているようでもあるのですが、実のところ見ているのは自分の心の中で、そこで奇跡的に自分が変わる幻を見ているのです。せっかく、ヨナにもまさる、ソロモンにもまさる方が立っておられるのに…です。

ニネベは悪名高いメソポタミアの町で、神はその町を滅ぼさねばならなくなりました。そこで、預言者ヨナが遣わされ、彼の説教によって悔い改めたのです。なぜ悔い改めたのかについて、ヨナ書は「神が惜しんだからだ」と言われます。ニネベの人々は、悪の中で苦しむ自分たちをなお惜しむ、慈しみの神を、ヨナの説教の中に見たのです。

また南の女王が、はるばる地の果てからやってきたのは、自分が考えついた知恵をソロモンに披露するためなどではなく、自分が知らない慈しみに満ちた神の知恵を求めたからです。彼女の目も、自分の心ではなく、神に向けられていました。つまり、ヨナの説教にも、ソロモンの知恵にも、慈しみと憐れみに満ちた神のお姿が見えていたのです。そして、それにまさる主イエスが、神の慈しみと憐れみを携えて立っておられるのです。

にもかかわらず、せっかく主の前にやってきたのに、愛と慈しみの主を見ずに彼らは自分の心の幻ばかりを見ているのです。彼らのしるしを求める態度には、不平不満が透けて見えています。さらに言えば「神さま、私の不幸はあなたのせいだ」と責める心さえそこに見つかるものです。

そのようにしるしを求める時代を「邪悪な時代」とおっしゃったのは、前段の悪魔の話からの続いているからでしょう。邪悪な者の業は、神が生きておられることが意味がないと思わせることです。時代とは、そういう神が隠されてしまう時代だということです。

そのように主を隠すために、悪魔は目を占領します。創世記で蛇は、神が禁じた実を食べると「目が開ける」とそそのかします。これも「目」です。さらに、人がそれを見ると「食べるによく、目には美しい」と言われているとおりです。サタンの業は、目を自分が考える善さや美しさに縛り付けることです。

ここでの群衆は、せっかく主のもとにやって来ているにもかかわらずに、主に現された神を見ずに、「もっとよく、もっと美しいものを！苦しみや欠乏に満ちた今の生活が一気に打ち壊され、良く美しいものを奇跡的に与えてほしい」と願うばかりです。欠乏や苦しみから救い出してほしいという祈りそのものは、詩編にもある祈りですから、間違っているわけではありません。主イエスも、そう願う彼らを門前払いせずに、受け入れて懇々と語っておられます。

その御姿からわかるように、主イエスは表面上の奇跡から事を始められません。愛と慈しみから、事を始め、進めなさるのです。愛と慈しみに満ちた神を、澄んだ単純なまなざしで見ることで、御業は勢いよく進み始めます。そうでなければ、一つ物が与えられたら、また別の不足が気になるでしょう。無いものねだりは止まらず、不平不満不安の虜になるでしょう。知恵そのものの神は、私たちが奇跡において求めるものが、二手三手先でどこにたどり着くかをご存じなのです。

●招きの光

主イエスは「入ってくる人に見える光」の話をなさい、明らかに現されているのは、神からの温かな招きの光だと語られます。お店ならば、人を招くときに、暖簾（のれん）が出してあります。今なら《オープン》や《ウェルカム》の札がかけてあったりします。そして、お店の中には、温かな光が灯されている。客を招くためです。そうすると、私たちは「ああ、招かれている。入って良いのだ」とわかります。神は、燭台の上に灯を掲げて、入ってくる者を招くのです。それが、もう少し後で語られる「自分の中にある光」(35)と言い換えられているのでしょう。神の招きを知ったときに感じた光です。入信の時に知った光です。神が愛によって招き給う神だと、シンプルに受けとめたあの光があなたのうちに輝いているだろう、と主は思い起こさせなさいます。

にもかかわらず、主がご覧になったのは人の不可解な振る舞いです。「あなたがたを見ていると、まるで穴蔵や升の下に光を探すようだ」と言われています。主の光よりも、穴蔵や升の下が気になるのです。主を見るひとすじのまなざしがなければ、光の主がやってきても、私たちは見る方向を間違えて「ああ穴蔵はこんなに汚れていたのですね。ちょっと待ってください、今きれいにしますから」と慌てるばかりになるでしょう。そうではないのです。自分の罪深さを見るのではないのです。単純な、ひとすじのまなざしで、その暗さに光を与えてくださる主を見るのです。

ある求道者が洗礼の準備をしているときの話を聞いたことがあります。なかなか洗礼が決断できないのです。「キリスト者としてやっていく自信がない」と導いていた伝道者に漏らすと、彼女は「あなたは自分で信仰を持とうとしているのね。それじゃあダメね。信仰とは与えられるものよ」と導いたそうです。

ここで言えば、自分で照らすのではなく、変わることのない招きの光が主から与えられるということです。信仰とは、この招きの光の確かさを信頼することです。そうしてこそ、私たちは信仰の決心ができます。

先週の祈祷会での証しでの対話を思い出しました。今、祈祷会では黙示録を読んでいますが、終末の難しい話も多いのです。大きな悪と、それよりも大きく力ある神との戦いが描かれると、私たちの理解が追いつきません。深淵の闇の深さと神の光の強さに幻惑を覚えます。証しの時間になって黙示録はむずかしいと何人もの人が感想をお話になりました。さらにその中の何人かの人が、「私は自分が救われると単純に信じている」と改めて言われました。それは、入信の時に招きの光の暖かさを覚えているからです。信仰生活を支えるのは、シンプルに神の愛の確かさや暖かさを信じ味わうことだということです。

黙示録も実は同じで、貫かれている信仰はシンプルです。同じヨハネが手紙の中で書いた「神は愛なり」を、この黙示録でも書き続けているのです。裁かれねばならない世の悪の現実です。ローマの暴君の狂ったような支配によって殉教者の血が流されるという現実なのですから。そして、その世に対する神の厳しい裁きが書かれます。しかし、この厳しい裁きの幻が描かれる巻物を解く前に、念入りに巻物を解くのにふさわしいのは、屠られた小羊だと語られています。血を流し、愛を注ぎ、神の真実をもって必ず救うと言われる小羊イエスがこの幻を進めておられる。それを、目を覆いたくなるほどの厳しい現実の中で、ヨハネはまっすぐな、単純な信仰のまなざしを小羊イエスに注ぐのです。

●少しも暗い部分がないなら全部輝く

今日お読みした終わりの部分で、「少しも暗い部分がないならば」と言われますが、なんだか落ち着かなくなってしまうのではないでしょうか。穴蔵や升の下が残ると言えばそうだからです。罪深さがなくなるわけではありません。この世界の暗さが払拭されるわけでもありません。けれども、言われている「暗い部分が少しもない」は、そういうことではなく、《光の強さを大胆に信じている》ということです。小さな目から入ってくる光が、どんなに力ある光であって、闇を追い立ててしまうということを、残存する穴蔵や升の下の暗さに逆らって大胆に信じるということです。

そのように大胆に信じるときに、自分のうちの光は暗くなることはありません。入り口で知った愛の光は再び赤々と燃え始めます。そうして、「全

体が輝く」のです。人生にある暗さ、世界にある暗さをも含めた全体が、光によって闇を退かせつつ輝き始めるのです。

　今朝は聖餐を祝います。パンとぶどう液を飲み込みます。それは、退くことのない光を飲むことです。単純なまなざしで、与えられる恵みを今受けとめたいと思います。